



からしだね

2017年1月号
(523号)

キリストの受難 カトリック池田教会

共同宣教司牧：畠 基幸 神父・中村克徳 神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：http://www.wombat.zaq.ne.jp/catholic_ikeda/



12月4日のミサで御聖体を授ける中村克徳神父。
末永く、わたしたちをお導きください。

本号の記事とその掲載ページ

巻頭言 中村克徳神父 2
「新しい年の始まりに向けて」

「わたしたちの中にイエスが生まれ、育つ」
岡本大二郎神父(サレジオ会) 3~5
降誕節黙想会(11/27)の岡本神父の講話
が書き起こされたのを味わい、再度黙想しよ
う。

日曜学校小学生が売布の森へ 6
売布の修道院の森で工作と昼食、森の散歩
を楽しみ、松本一宏神父の墓参り、十字架の
道行、お祈りで恵みをいただけた遠足の報告。

1/22に高山右近列福記念講演会へ 7
キリシタンの大大名と呼ばれたユスト高山右近
は何処がわたしたちとは違っていたのでしょうか？

巻頭言

新しい年の始まりに向けて

中村克徳C.P.

池田教会の皆さま、主の御降誕と新年おめでとございます。池田教会に赴任して早や半年を迎えました。2016年を振り返ってみると、松本神父様の帰天とデニス神父様の帰国や身近な人々の帰天など、幾つもの悲しい出来事が重なり合うようにやってきた一年であったように思います。神様はなぜわたしたちの祈りを聞いてくださらないのだろうか、という疑心暗鬼に陥りそうになった人もおられるかもしれません。それは人として当たり前の感情でしょう。しかしながら、神様へ不信感を抱いたままで新しい年を迎えるのは、キリスト者にとって辛いことです。なんとかこのモヤモヤした思いを払拭して、この一年を希望に満ちた年へと変えていく必要があります。そこでいま一度、主の御降誕の出来事を思い起こしてみたいと思います。

イエス様がお生まれになったのは、イスラエルの偉大な王様であったダビデの出生地であるベレヘムです。宿屋から断られたため、マリア様とヨセフ様は家畜小屋代わりの洞窟で宿を取らなければなりません。冬の凍てついた寒さの中で、イエス様は世に来られたのです。あまりにも貧しく、みじめな状況の中でお生まれになったのは、人として一番小さな存在になるという意味が込められています。救い主なのですから、わざわざ赤子の姿で来られる必要はなく、大人の姿で忽然と人々の前に現れたほうが神秘的です。赤子は、人の世話にならなければ一日たりとも命をつなぐことができない弱い存在です。大切なひとり子を弱い人間の手に委

ねるのは、父なる神様にとっても大きなチャレンジではないでしょうか。それは、神様がわたしたち人間を深く愛している証なのです。

次に、最初に救い主の降誕を告げ知らされたのは羊飼いたちですね。ルカ福音書には、突如として天使の大群が天に現れて、救い主の誕生を彼らに告げたと書かれています。なぜ天使たちは、祭司長や指導者たちではなく、貧しい羊飼いたちにこの大きな喜びを真っ先に知らせたのでしょうか。彼らの仕事は過酷です。昼夜を問わずに暑さ寒さを耐え忍びながら羊を外敵から守るために、あるいはさ迷い出ることのないように交代で番をしなければなりません。彼らは社会から疎外され、夢も希望もないままに生きていく、弱く貧しい人たちを代表しています。それは、神様の救いは、すべての人に例外なくもたらされることを示すためなのです。

2017年も、辛く悲しい出来事がわたしたちの周りに起こるかもしれません。ある時には耐えがたいような苦しみも襲うこともあるでしょう。でも、どうか希望を持ち続けてください。神様はその人が担いきれない重荷を負わせることは決してなさらないと、信仰の先人たちは教えています。イエス様は弟子たちに次のように言われました。「その悲しみは喜びに変わる(ヨハネ16章20節)」この言葉に希望をもって、この新しい年の一步を踏み出していきたいものです。

1月のガラスケースのことば
見えるものはこの世かぎりのものですが、
見えないものは永遠に続く

コリント2 - 4・18

待降節黙想会 (11/27)

わたしたちの中にイエスが生まれ、育って行く 岡本大二郎神父(サレジオ会)

第一講話

わたしたちの中にイエス様が生まれ、育つ

イエス様は2000年前マリア様のおなかの中に宿って生まれました。イエス様はまた生まれたいと思っています。皆さん一人ひとりの中に生まれたい、と思っていると解釈できます。一人ひとりの中で生まれ、育ちたい、大きくなりたいと思っている。イエス様は皆さんの中に来たいのです。

私の中にこれからイエス様がやってきます。その思いにどうこたえようかな？ 大きくなるために邪魔になるものはないかな？ これをしたらイエス様は悲しむかな、これをしたら喜ぶかな、などと考えてみてください。なにが自分の中でイエス様を育てているかな、と考えてください。大きく育てられるでしょうか？

私たちを通してイエス様が生まれる、その準備をしてほしいと思います。私たちの中には暗さがあります。人を傷つけたりします。でもイエス様の体を拝領することで、光を体の中に灯すことができます。

ドイツの宗教詩人のシレジウスは次のように言っています。

「キリストが1000回ベツレヘムで生まれても、あなたの中に生まれなければ、永遠に無意味だ」

クリスマス、待降節の意味はそこにあると思います。私たちの中にキリストが生まれ、生き、育っていくのです。

第二講話

フランシスコ教皇の魂の暗夜

フランシスコ教皇はとても人気ですよ。ドン・ボスコ社のカレンダーもダントツにフランシスコ教皇の写真カレンダーが売れています。

なぜ人気なのか？ 私は霊的読書を修道院でするのですが、フランシスコ教皇が書かれた本はとてもわかりやすい。ダイレクトに伝わるものがあると思います。今までの教皇が言わなさそうなことをサラッと言っちゃう方ですね。

「教皇になってどうですか？」というイエズス会の神学生からの質問に、「神様は自分がそうなりたいと思っている人は祝福しない」と答えました。なり

たいと思ったわけではなく、自分の使命として引き受けた。教皇の宮殿に住まず、質素な生活をしているのはご存じですね。だから、あまりバチカンの人に喜ばれていない。そのもとで働いている人も質素を強制されるから(笑)。

これから、昨年アメリカで書かれた、ある記事について紹介したいと思います。教皇様のあまり語られない時期の話です。

フランシスコ教皇は力強い人です。多くの人を一瞬にして魅了します。いろんな伝記が出版されました。いろんな本がでましたが、空白の2年間と呼ばれる、1990年から92年の2年間については、あまり書かれていません。アメリカのあるメディアはその2年に焦点をあてて取材しました。その2年間、コルドバというアルゼンチンの都市で、のちにフランシスコ教皇となられるベルゴリオ神父は生活していました。

ベルゴリオ神父はイタリア、ピエモンテ地方出身です。おばあさんが信仰深い人でした。16歳になってゆるしの秘跡を受けた時に「人生が決まる出来事」が起こり、神父になる決心をしたそうです。そしてイエズス会に入会。宣教師として日本に行きたい希望を持っていましたが、肺の病気になり宣教師を断念しました。

アルゼンチンで司祭叙階し、36歳でアルゼンチンのイエズス会管区長になりました。リーダーシップに富んだ他の神父が管区長になる直前に事故で急死したので、ベルゴリオ神父に白羽の矢が立ったのです。

ベルゴリオ神父が管区長となった1973年、イエズス会は嵐の中にありました。その8年前に第二バチカン公会議が終わっていて、内向きだった教会が世界に扉を開いた状態に変わり、それについていけない神父が次々と修道会を去っていった時代でした。

アルゼンチンの政治的な状態も最悪でした。軍事独裁政権の時代で、反対者が殺され、多数の行方不明者が出ました。汚い戦争と言われているくらい、アルゼンチンにとっては困難な時期でした。2人のイエズス会の神父が軍事独裁政権に反して、貧しい人のための活動を始めると、軍事政権から目をつけられ、2人の神父が誘拐されるという

事件が起こりました。イエズス会は軍事政権の監視下に置かれてしまいます。イエズス会は修道服を着た共産主義者と呼ばれるようになりました。ベルゴリオ神父はこの政治活動を支持しませんでした。2人の神父にこのまま社会活動、政治活動を続ける気ならば、イエズス会を出るように勧告しました。その後2人は誘拐され、のちに釈放されました。そのさい「ベルゴリオ神父は貧しい人の側にたつ教会を支持していないのではないか」と言われました。

ベルゴリオ神父は管区長として非常にはっきりとものを言い、ビジョンを明確に示し、痛みを伴う決断をする人でした。イエズス会経営の大学を手放し、それによってイエズス会に新たな火種を持ち込みました。彼を支持する人と支持しない人が修道会内で分裂したのです。

友人が次の管区長になると、ベルゴリオ神父は神学院の院長に任じられ、神学生を育てることになりました。神学院院長として、彼は神学生が政治に染まる前にまず「牧場で働く」ことを命じました。実際に働くとはどういうことかを学ばせたのです。自分に従わない者には厳しい措置を取りました。実際に貧しい人とかかわる、その牧場活動を支持する人もいたが、そうでない人も多かったのです。

神学院院長の任期を終えたとき、新しいイエズス会のリーダーは彼の反対派でした。彼のビジョンについていけない人、ビジョンが分裂をもたらしたと思っている人がいたのです。

ベルゴリオ神父はドイツに行くように命じられました。しかし数ヶ月でアルゼンチンに帰国し、従順の誓願を破ったのです。帰国後、しばらくは仕事が少しありましたが、その後苦しい時間が始まりました。何の仕事も与えられず、コルドバに送られました。働き盛りの50歳なのに、何一つ仕事のない状態でした。

この2年間に何があったのか？ アメリカのジャーナリストは調べることにし、神父がその当時出会った人に会って話を聞きました。

それは、完全に仕事を干された状態でした。毎日2足の靴下の1足を自分で洗う。ミサを手伝ったが責任ある仕事ではなかったし、祈り、ときどきゆるしの秘跡を聞く以外は、イエズス会のレジデンスで

家事の手伝いをするだけ。一人貧しく生き、神父らしい仕事を何一つできずにいたのです。

レジデンスの聖職者でない管理人との間に、こんなことがあったそうです。

ベルゴリオ神父は管理人の一人が家建てたので、新居の祝いに出かけていきました。ところが、手違いのせいで家に贅沢なプールが設けられていたのを見て、その管理人に対し、烈火のごとく怒ったそうです。

仕事を与えられず、ずっと孤独にすごし、精神がおかしくなったのでは？と言われた時もありました。展望のない時期でした。しかし、この取材記事は「この時期はベルゴリオにとってとても大切な時期であった。」と結論づけています。

自分の優秀さとビジョンが否定される経験をし、彼自身も伝記の中で「その時期は自分にとって浄化の時期であった。暗闇の時期ではあったけれど、たくさん祈り、たくさん本を読んだ。その中でなぜか教皇の歴史の本を読んだ。多くの教皇も苦しみの中で人生を送ったことを知った」と言っています。自分を見つめる時は2年の長きにわたりました。自分の強引さがその孤独を招いた原因だが、周囲の誤解も自分を孤独にしたのです。追放の時間を味わいながら、預言者エレミアも重い責任を果たす一方で、拒絶されていたことを知り、彼はエレミアに自分の姿を重ねました。

ベルゴリオ神父は、のちにアルゼンチンの6人の司教の一人（ブエノスアイレスの補佐司教）に任命されることでイエズス会から離れ、やがてアルゼンチンの大司教となりました。だが、イエズス会の反対派とはすぐ和解ができたわけではなく、傷つけ、傷つけられた事実がしばらくは重く残ったのです。

しかし、彼のリーダーシップの執り方が変わりました。司教になってからは、決断する前に他人と相談するようになりました。コルドバでの孤独の2年がなかったら、今の教皇の姿はあり得なかったであろう、と記事は結んでいます。

彼の力の源、言葉の源は自分が拒絶された経験を持っているからだと思えます。「あなたはどなたですか？」という質問に、ベルゴリオ神父は「私は罪びとです」と言われる。言葉の綾で言っているのではなく、実感でそう言っているのではないのでしょうか？人々を傷つけ、人々に傷つけられた経

験があるからです。

イタリア人神学者で、イエズス会のナゴーン神父は教皇と強いかかわりをもっています。ナゴーン神父は「失敗の神学」という本を書いていて、その中で「キリスト教は何だろう？」と尋ねられて、「イエスが失敗したということに基づく宗教だ」と答えています。人間的に言えば「イエスは失敗した。この世ではローマ人に殺され、弟子たちに見捨てられて、家族にも完全に理解してもらえたわけでもない。そしてイエス自身も自分が失敗したと信じて死んで行ったところがある」のですが、そこで終わりではなかった。「死と絶望の十字架が復活のシンボル、新しい命のシンボルになった」という逆転の発想。これがキリスト教の秘密です。そこにベルゴリオ神父とナゴーン神父との特別のつながりがあります。ナゴーン神父の本がベルゴリオ神父を支えるものとなっているのです。

彼が2年間、苦しみの中にあつたことは、私を深く考えさせ、勇気づけられるものになっています。私自身、学校での勤務において難しい、うまくいっていないと感ずることがあります。拒絶されている、受け入れて貰えていない経験、それこそがまさしく私たちの希望の場であり、復活の場所です。ベルゴリオ神父の、今までやってきたことを全否定された経験こそが、今の教皇職につながっています。

私たち自身も「自分は理解されていない、わかってもらえない」という経験を持っていると思います。そこがまさに自分の生きる場所なのです。キリストは私たちに言う。「自分についてきなさい、わたしは道、光、真理である。私についてきて一緒に十字架にかかって死になさい」と。否定されたことに否定で返さずに、受け止めて肯定して、その中で人々にゆるしと光をもたらす存在になりましょう。クリスマスまでに私たち一人ひとりの中にイエスを育てていきましょう。わたしたちは、それぞれ、ベルゴリオ神父とは違った暗闇を持っているかもしれませんが。与えられた暗闇の中を生きながら、自分の中にいる光であるイエスの道をあゆんでいけますように。

「痛み」を背負いながら務めている教皇が失わうことがなかった希望の言葉を記して講話を終えたいと思います。

「イエスは私たちのために教会を建てられただけではありませんでした。教会は憩いの場ですが、イエスがなされたのはそれだけでなく、私たちを教会として建てられました。イエスは私たち自身を教会にし、わたしたち自身が教会になっていく。世にキリストをもたらすものになって行く道を歩みたい。」

(講話の書き起こしは研修委員会)

「サイコロの会」烟河温泉日帰り紀行

「サイコロの会」も早いもので回を重ねること7回、おでん、カレー、冷し中華等々、毎回皆で手作りして会食し、その後のおしゃべりにも花を咲かせてきた。

今回(11月30日)は紅葉の頃とて遠出を試み、総勢16人で亀岡の烟河温泉へ。2台の車に分乗し、前の車は畠神父様の愛車レクサスを借り受け、後続の車はMさんの運転。「美人は、後ろに乗って。」の声掛けで、かくいうわたしもついフラフラと後ろの車に。Mさん以外は女性ばかりの自称美人連盟である。

池田をほぼ11時に出発し、173号線を北へついで能勢路に入ると、辺りの山は黄葉の盛り。色づいた木々に日差しが当たって黄金色を呈している。紅葉は思いの外少ない。一庫ダムは静かに水を湛えて遠く数羽の鴨を浮かべている。

鴨の声ひとつこぼせる午後のダム

12時過ぎに、烟河温泉に到着し、食前に入浴。少しとろみを帯びた薬湯に身を委ねる。

湯の宿の1枚ガラス照紅葉

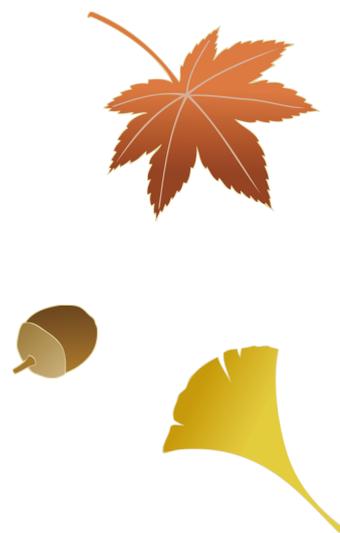
豪華なバイキングでそれぞれお腹を満ち、うとうとしながら帰りの車に乗ったのはいいが、これがまた大変。「『サイコロの会』を『認知症(予防)カフェ』に変名しよう」、とか、「『骨折りランチ』はどうか」、とか、果ては、「通帳隠して、忘れるようになったら、どうしよう。」「あんた、そんなに持ってるん?」。もう、はちやめちや、言いたい放題。隅でおとなしくしていた私は、書き手のない一日紀行文まで押し付けられてしまった。せつかく、今晚は温泉の効能で、身も心もリラックスできると思っていたのに。

とは言え、とても素晴らしい秋の一日を頂いて心から感謝。往復2時間の道のりを絶え間ない喧嘩を背に黙々と?運転して下さったFさん、Mさんに感謝の一日であった。

Y.K.

日曜学校の子どもたちは売布の宝塚修道院へ遠足

11月19日



11月19日(土)に池田教会と日生中央教会の日曜学校の子どもたちは先生方と一緒に売布の宝塚修道院の森へ遠足しました。

前日夜から強く降っていた雨は当日朝によやく止み、おもいきり外遊びはできませんでしたが、修道院の室内で共に工作や食事を楽しみ、十字架の道行きができたことは神様からの大きなお恵みでした。

昼食後は、十字架の道行きのあとに修道院奥へ移り、松本一宏神父様のお墓に向

かって、「みんな元気だよ、神父様見守ってください」とお祈りました。

その後、聖堂でウオード神父様と一緒に祈りをし、きれいな紅葉とたくさんのドングリ、自然の恵みの中を子供たちと一緒にいると神様も松本神父さまもニコニコして一緒に歩いてくださっている、そんな気がしました。

また、みんなでお出かけしようね。松本神父様も一緒にね。

H.K.

高山右近列福記念講演会「高山右近の信仰」への誘い

研修委員会から

1月22日ミサ後、高槻教会の岡本稔さんをお迎えして、高山右近列福記念講演会「高山右近の信仰」を聖堂で開催します。ぜひご参加ください。

「高山右近」と聞いてどういうイメージをお持ちですか？キリシタン大名、利休七哲、棄教を拒否した信仰のあかしびと、日本のキリシタンのリーダー的存在…。立派な、なんだか一般信者からかけ離れた存在、と思う方もいるかもしれません。私自身、実は彼の霊名をいただいています。30年前、イエスを名前、キリストは苗字と思い、サンタクロースってキリスト教やクリスマスとどんな関係があるねん？と全く無知な状態で夙川教会を訪問しました。それが縁で公教要理を習い始めて数か月後、「カトリック教会」として認識して入った2番目の聖堂が玉造でした。

歴史オタクになりかけていた私の家には戦国時代を題材にした小説がいくつもあったので、玉造入り口右側の細川ガラシャは知っていましたが、左側のサムライは誰ですもん？とそこで初めて高山右近に出会いました。受洗時はスーパー信者のような彼がかっこよくって信仰に（当時は）燃えていたわたしは彼のようにキリストを証する人になりたい、と思い霊名にいただきました。

洗礼を受けて30年弱、彼に対する愛着はいまだに弱まることはありません。しかし、彼のスーパー信者の部分ではなく、今はキリスト者ゆえに苦しみ、その苦しみを祈りに昇華していった右近に魅力をより感じます。

私は伊丹在住です。JR伊丹駅には440年前、戦国大名であり右近の上司であった荒木村重の有岡城がありました。そこに右近は子供を人質として差し出していたのですが、荒木村重が信長に反乱を起こしたことで右近は教会を人質に取っている信長につくか、子供を人質にとっている荒木につくか難しい選択を迫られることになりました。多分何度も荒木を説得するために高槻からJR伊丹駅付近を行き来していたことでしょう。父親は頑強に荒木につくべきだと主張します。彼の心は引き裂かれます。一人茶室に入り、神に祈り、彼は決断します。高槻城を開城し、自身は髻を切り、サムライをやめ、キリシタンの命を助けてくれるよう信長に下ります。城を枕に討ち死にすることや、切腹・自害というサムライの名誉よりも、キリストとキリスト者の生き方を選んだ右近でした。苦しみの中、神へ熱心

に祈り、決断した彼の生き方に魅力と尊敬を改めて感じます。

彼の生涯は私の下手な文章よりヨハネス・ラウレス著「高山右近の生涯」（聖母の騎士社刊、2016）などを読んでいただいたほうがより理解できると思います。ぜひお読みください。

現代の社会情勢は混とんとしています。経済においては大企業が海外進出したと思えば突然倒産したり、外資に吸収されたり。政治においては国と国とが対立しています。宗教においては、個々の信仰は平和を求めているはずなのになぜか反目しあっています。上の指示に従っていたらまあ、大丈夫、という時代ではなく、一人ひとりが「今何をすべきか」考え、表現しなければ前に進めない難しい時代に入ったと思います。まさに「乱世」です。

乱世にキリスト者として生きた右近は今の私たちに教えてくれるものがたくさんあると思います。

「ここには黒田官兵衛は来る？」と10年ほど前、小学生低学年だった息子がおもむろに被昇天学院聖堂での北摂地区大会ミサの直前、私に尋ねました。（なんという質問だ！笑）「ここには官兵衛は来ないよ、彼は姫路の人だから姫路大会にいきはるんちやうか？ここに来るとしたら高山右近だな」と答えると息子は満足気に笑っていました。

そう、右近は北摂地区という共同体の仲間であり、頼りがいのある信徒です。私にとって彼がいた北摂地区で教会活動ができるのはなによりの恵みです。私は右近を霊的兄として慕っています。教会での活動は全部右近にとりつぎを願っています。教会での楽しいこと、うれしいこと、へこんだことしんどいこともすべて右近に話しかけ、取次ぎとアドバイスを願っています。

2017年2月に彼は福者として教会で認定されます。その前に改めて、北摂で信徒として走り回った高山右近とより親しくなるために霊的読書、祈り、そして1月の講演会に参加してみませんか？私は高槻などに巡礼に行つて準備をしたく思っています。

最後になりましたが、右近列福のために尽力してくださった溝部司教様、ありがとうございました。列福式を神様と一緒に天国で見守ってください。

研修委員 ユスト・グラチア H.K.

教会受付当番を募集しています

—総務委員会のお願い

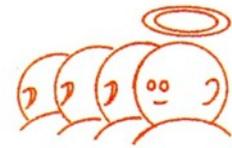
教会受け業務は、現在男性5名と女性25名の計30名の信徒の方がたに月曜から金曜の平日の午前の部（10時～13時）と午後の部（13時～16時）に分れてご担当戴いています。

受付業務の主な内容は“電話当番”と“宅配便などの受け取り”です。電話当番については「対応マニュアル」も在りますので、初めての方でも容易に対応していただけます。

近年、信徒の高齢化に伴い様々なご事情で担当を辞退される方が増えておりますので、新たに担当者を募集しています。一ヶ月に3時間だけでも新たに教会受付にご協力いただける方がおられましたら、本担当までお申し出ていただきたくお願いいたします。



…裏表がない



…隣人を第一に考える

編集後記

新しい年になって新しいカレンダーに替わるだけで10代だった私の心の鮮度が上がったのを記憶しています。還暦を越した頃から、変化する方向が逆になって疲弊や老化するより現状維持の方がまだと現実的になってきました。8年前に洗礼を受けてから「信じる」や「愛する」、「希望を持つ」、「ゆるす」が例外的にしかできないのに、「疑う」や「恐れる」、「諦める」、「責める」のは容易にできるのを意識するようになりました。ジャン・バニエは「愛する」ことは賜物として戴かないとできないと書いていますが、他の3つのことも同じではないかと…。

「希望」について、USAにおける公民権法運動の指導者・キング牧師の有名な演説を見てみましょう。長い奴隷としての試練の中で戴いた賜物、人々に共有した希望、によってその運動は成就したのです。

「わたしたちには夢がある。いつの日にか、すべての谷は隆起し、丘や山は低地となる。荒地は平らになり、歪んだ地もまっすぐになる日が来ると。『そして神の栄光が現れ、すべての人々が共にその栄光を見るだろう。〈イザヤ40:4-5〉』これが我々の希望なのだ。」

数々の試練で戴いた賜物、永遠の命への希望、を持った高山右近は金沢に於いて教会を建て、多くの人々を教会に導き、金沢からフィリッピンへの厳しい追放の旅でも快活に振舞って家族を守りました。（参照「ユスト高山右近 いま降りて行く人へ」（古巣 馨、ドン・ボスコ社、2014））

「からしだね」本誌の2つの記事には、中村克徳神父（巻頭言）は悲しみの年（2016）から喜びの年（2017）への転回の希望を示され、岡本大二郎神父（待降節黙想会講師）は第二講話において、2年間の魂の暗夜を希望の場に逆転されたフランシスコ教皇を紹介されました。インマヌエル

黙想会のお知らせ 宝塚黙想の家から

■日帰り黙想会

1月19日（木）10:00～15:30

指導：山内十束神父

1月20日（金）10:00～15:30

指導：山内十束神父



■週末黙想会

1月21日（土）17:00～22日（日）15:30

指導：山内十束神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84)3111



…自分の弱さを
知っている



…子どもの心を
持っている